

第2回宇治市総合教育会議議事録

日 時 平成27年12月24日(木) 午後5時30分 開議

場 所 宇治市役所 特別会議室

次 第

- 【1】 開会
- 【2】 市長あいさつ
- 【3】 日程 「学力」について
宇治市立笠取第二小学校における抹茶体験学習の視察について
その他
- 【4】 閉会

出 席 者

宇 治 市 長 山 本 正

宇治市教育委員会

委 員 長 西 野 正 博
委員長職務代理者 金 丸 公 一
委 員 中 筋 斉 子
委員(教育長) 石 田 肇

宇治市教育委員会事務局

部 長	中 村 俊 二	教育支援センター長	瀬 野 克 幸
参事(兼生涯学習課長兼生涯学習センター所長)	藤 原 千 鶴	教育総務課長	河 田 政 章
一貫教育課長	金 久 洋	教育支援課長	富 治 林 順 哉
一貫教育課副課長	市 橋 公 也	一貫教育課総括指導主事	辻 弘 一
教育支援課副課長	海 老 瀬 正 純	教育支援課主幹	二 木 明 美
教育総務課企画庶務係長	上 田 ひ と み	教育総務課主事	久 野 晴 香

開 会 (午後5時30分)

【1】 開会

【2】 市長あいさつ

<市長>

大綱に位置付けた宇治市教育振興基本計画の「教育ビジョン」では、3つの基本目標と14の施策を定めており、その1つ目に「学力向上をめざす教育の推進」を掲げているところである。

本日の会議では、本市が推進する教育の中でも「学力」をテーマに議論を交わし、理解を深めていきたいと考えているので、活発なご発言をお願いしたい。また、先日、笠取第二小学校で実施された抹茶体験学習の視察についてもご意見を伺いたいと考えている。

【3】 日程

「学力」について

<事務局>

本日は「学力」をキーワードにして、意見の交換をしていただきたいと考えている。

はじめに、「学力」に関わって、ここ10年ほどの国レベルの動きから説明する。現在の学習指導要領の一つ前の古い学習指導要領は、「生きる力をはぐくむこと」が基本理念とされ、「基礎的・基本的な内容の確実な定着」が含まれていた。その後の一部改正を経て、この「生きる力」が「変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい『確かな学力』『豊かな人間性』『健康と体力』の3つの要素からなる力」と位置付けられた。平成19年には中央教育審議会から「審議のまとめ」が出され、また、学校教育法が平成19年に改正され、学力の重要な要素として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学習意欲」の3つが定められ、これらを「学力の3要素」と位置付けた。

次に京都府教育委員会の動きであるが、現在は平成19年度に「京の学力向上検討委員会」から出された提言によって学力向上の施策を進めており、この提言の中で使われている「質の高い学力」というキーワードが、京都府が目指すべき学力の姿を端的に表していると考えられる。この「質の高い学力」は、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「学習意欲」の3つの要素が統合された学力と位置付けられている。

宇治市の子どもの状況については、今年度の全国学力学習状況調査や京都府学力診断テストの学習状況調査結果から見ると、京都府平均、全国平均を下回っている状況にある。全国学力学習状況調査では、国語、算数(数学)、理科に対する学習意欲を見てみると、各教科の学習について「勉強が好きである」「勉強がよく分かる」という質問に対し、「当てはまる」「どちらかと言うと当てはまる」と肯定的に回答した割合を全国の数値と比較したところ、調査学年全てにおいて差がある状況が明らかになるなど、「学力を支える基礎となる力」と言うべき内容での課題も見られる結果となった。

本市では、小学校3年生から中学校3年生で実施している「総合的な学習の時間」を「宇治学」と称し、本市が進めている小中一貫教育の特色ある教育活動と位置付け、全ての小中学校で実施している。「宇治学」は「宇治で学ぶ、宇治を学ぶ、宇治のために学ぶ」をコンセプトに、「総合的な学習の時間」のねらいを加味した「地域社会の一員としての自覚を持ち、ふるさと宇治をよく知り、諸問題に目を向け、主体的、創造的、協同的に取り組む

ことで、よりよく問題を解決する資質や能力をはぐくむ」ことをねらいに位置付け、探究的な学習の切り口となるような「宇治学」の副読本を作成しているところである。児童生徒が「宇治学」に取り組むことで、少しでも主体的、創造的に学ぶような素地を身に付けてくれればと考えている。

この後、本日の会議のキーワードとして設定した「学力」について、ご意見をいただきたい。「学力」と言っても、色々な解釈、捉え方があると考えている。分類のされ方には多様なものがあるとされているが、一つの分類例を挙げる。「学力」を「3つの学力」と位置付けるもので、国も京都府も3つに定義しているが、その形を変えた表現であると思っ

ていただきたい。

1つ目は、「狭義の学力」とされ、学校が行う定期テストなどのペーパーテストで測定しやすい知識・理解・技能で、旧学力という表現をされる場合もある。いわゆる、「基礎・基本」と言われているもので、すべての学習の土台になるものである。

2つ目は、ペーパーテストでは測定しにくい思考力、文書読解力、課題解決力、表現力などで、「みえにくい学力」「新しい学力」などと表現されることもある。

3つ目は、「広義の学力」とされることも多く、「学ぶ力としての学力」である。自発的な学習意欲、知的好奇心、学習を遂行するための計画・方法・集中・持続の力、教え合い・話し合いをしながら学んでいくコミュニケーション力などの学習活動を支える力、そして生活習慣や学習習慣も広い意味での学力に含めることができるとされている。

それぞれは単独に存在するのではなく、それぞれがお互いに関係があると考えられる。

学校教育として向上すべき「学力」をどのように考えれば良いか、今、期待される「学力」、これから将来にわたって期待される「学力」は何なのか、トータルの「学力観」を見極めていく必要があると考える。そして、いわゆる「学力」の底上げを図るためにどのようなことが考えられるか、あらゆる観点からご意見をいただきたい。

<市長>

昔も今もこれからも確かな学力というのは何かというと、小中学校では基礎・基本のはずだと考える。ペーパーテストひとつで判断するには問題があることは十分承知しているが、全国学力学習状況調査においても京都府学力診断テストにおいても、総じて平均を下回っているということについては看過できない。厳しい意見だとは思いますが、このペーパーテストの結果、どういう授業の改善をしたのか、どういう対策をしてきたのか、小中学校ごとに明らかにしていくことが、信頼ある学校教育の学力のあり方だと考える。真剣に学力について考え、授業のあり方、学校のあり方というものを明らかにしない限り、この確かな学力というものは見えてこないと考える。

<委員>

自発的な力や判断力の向上などの広義の学力についてまず取り組んでいただくべきではないか。基礎的な狭義の学力を高めようと思うなら、まずは自発的な向上心がなければなかなか取り組んでいくこともできないと考える。それぞれの家庭で様々な状況があるため、学校の方で対策を充実し、きめ細かい指導、また、家庭学習の大切さを指導する体制を取

る必要がある。それが5年先、10年先の基礎的な学力、狭義の学力の向上にもつながっていくのではないか。

<市長>

要するに、様々な環境などについても一つずつ丁寧に取り組んでいかないと、着実な確かな学力にはたどり着けないだろうということだと感じた。広義の面を否定はしていないし、大事な要素だと思っているが、この結果に対して、危機感を持っている。保護者や市民で、日本一素晴らしい教育の宇治市に住んでいるという思いを共有したい。

<委員長>

確かに基礎・基本が全ての出発点であり、いくら広い意味の学力と言っても基礎・基本ができていなくて生きる力がついていくわけではないので、市長の言われることは至極当然であると思う。しかし、現場にいた者の感覚では、学校によって課題と目標とするものが違う。現在、宇治市教育委員会として、また学校として努力しているのが小中一貫教育であり、小1プロブレムをなくして中1ギャップをより少なくすることによって、学力等の向上を推進しており、落ち着いた環境を作り、落ち着いた生徒指導ができる学校にすることで、学力のアップということについては確かに考えていかなければならない問題であり、それぞれの学校現場で事情が違うので、一つひとつの学校がもう少し明確に、何に取り組んで基礎学力をアップさせようとしているかを打ち出していく必要があると考える。

<市長>

委員長のご発言のとおり、各校の目標や課題をもう少し見えやすい形にしていただければ理解しやすいのだが、貧困などの様々な状況というのは全てを詳らかに公表できないという要素が確かにあると思われる。しかし、確かな学力という視点で見れば、学校長が苦しんでいるのであれば何か手立てをしなければならず、教師の力量の問題であればその力量アップをしてもらわないといけないし、子どもたちに問題があるのなら子どもたちに焦点を当てる必要がある。

<委員>

学校の授業などを視察させていただく機会がある中で、現場の先生方が非常によく頑張っておられると感じている。これが現場だけの問題であるのか、貧困の問題や家庭環境が大変影響しているのか、また、予算的な事情も関わっているのかわからないが、例えば貧困というところに大きな要因があるのであれば、そこは福祉分野との連携も図っていかないといけないと考える。

<事務局>

どのような状況下にあるにせよ、今できることは何なのかについては突き詰めていく必要がある。

<委員>

宇治市では1つの施設一体型の小中一貫校と9つの施設分離型があるが、それぞれの学校や地域ごとに課題は別であるため、その課題を見えるような形で掘り起こしていただいて、それを狭義の学力と広義の学力につなげていくという意味でも、小中一貫教育というブロック体制での機能を今後も維持して、努力していただきたい。

<委員長>

昔は学力や生徒指導などについて問題が出ると、中学校の教師は小学校での教育が悪いと考えたり、小学校の教師は一生懸命育てた児童に中学校でもう少し丁寧な指導ができないのかと感じたりするなど、互いに批判をすることによって消化していたような面もあったが、小中一貫教育の中では小中学校のどちらが悪いなどということを書えなくなってきた状況にある。

<市長>

小中一貫校の良い面や評価は多数聞いており、有り難いことだと感じている。そういった良いところは当然伸ばして行っていただきたい。

また、テストの結果を見たときに、小中学校どちらにおいても点数の分布がどのような層に位置しているかということが気になっている。それによって打てる施策は変わるため、学校としての課題や授業の展開、先生の力量や親の問題、子どもの問題等を含めて、理に適った対策をしていただきたい。

<委員長>

自分が現場にいた頃は、点数の分布をグラフにした際に点数の低い部分と高い部分に二つの山ができる「ふたこぶラクダ」の状態が問題になっていたが、現在はどのような特徴になっているのか。

<事務局>

教科によって点数の分布は異なる。数学だと、グラフのカーブは平坦な状態にある。一方、英語だと「ふたこぶラクダ」になっている。

<委員長>

低い方のこぶを解決しないと、平均点そのものは上がらない。

<市長>

点数の低い方の子どもたちを勉強がわかるようにすることの方が、習熟度の高い子どもの点数を伸ばすよりも平均点は大きく上げられるだろう。勉強がわからずに苦労している層が多く、平均点が下がっているのであれば、その学校の課題を明らかにして適切に対応できているかということを確認していくことが大切だと思う。まずは、小学校の学力を重視していくべきであり、小学校の時に基礎・基本ができていないと、中学校になってから

できるようにはなりづらい。そういう基本的な話を、このような公の場も通じながら活発に論議することが、確かな学力を上げていくのではないかと感じている。

<教育長>

小学校1年生から2年生へと学年が進むにつれて内容が難しくなっていくため、小学校での基礎・基本が義務教育の中で大きな基礎、土台になっていることは事実である。特に基礎・基本については、学力が著しく低い階層があるならばその部分に対する手立て、極端には悪くないが十分な理解がされていない子どもに対する手立て、その両方を意識して対応の仕方を学校現場は考えていかないと、本当の意味での学力の充実はできないだろう。学校現場では特に課題の多い子どもについては府教委の施策も市教委の施策も両方が相まって、学力補充という面での取組を進めており、少しずつ改善は図られてきているように思われる。ただ、十二分にその結果が出ているとは思わないため、これからも学校現場には努力していただかなければならない。

また、学力問題を考えるときに、どのように子どもたちに家庭でも勉強が可能なように、勉強するように意識させ、意欲を身に付けさせるかということを考えて、教える側の問題と教えられる側の問題に対する取組を並行してやっていかないと、なかなか難しいのではないかという思いを強く持っている。現在の一貫教育の中で家庭プログラムという家庭での取組の方法など、家庭に対するお願い、啓発を進めているが、必ずしも十二分な成果が上がっているとは思えないので、学校と家庭とが両輪で子どもたちの学力が充実するようにこれからも進めていきたい。

さらに、市長のご指摘にもあったように学校の状況、特に子どもたちの状況だけではなく、それに対して学校がどういう取組を行っているかということが保護者や地域に見えるような努力をしていかないと、保護者の理解・協力も得られないだろうと思う。また、それが保護者を通じて子どもの方にも意識として反映され、自分たちの置かれている状況に対する理解も深まると思われる。今後とも学校はさらに保護者に対する情報発信、そして子どもに対する情報発信もしていくべきではないかと思っている。

<市長>

確かな学力というのは、ペーパーテストだけで測るものではなく、一人ひとりの学力であって学校の平均点ではないということをしかりと見つめて、努力していただきたい。そして、お互いに様々な情報や宇治市が最も教育において素晴らしいという思いを共有していくことが、この会議の最大の目的ではないかと感じている。

本日は学力について様々なご意見をいただいた。子どもたちが将来において自立できるために必要なものは何か、どんな学力なのかということ突き詰め、教育委員会は丁寧に現状を分析・把握し、学校現場や保護者、地域としっかり連携しながら具体策をとっていただきたい。宇治市ならではの小中一貫教育の手法を用いた工夫改善を今後も精力的にお願いし、それぞれのご意見について活かせるものは十分活かしていただきたい。

宇治市立笠取第二小学校における抹茶体験学習の視察について

<市長>

笠取第二小学校における抹茶体験学習の視察について、ご意見を伺いたい。

<委員>

今まで子どもたちに宇治学のような体験をする機会は無かったと思うし、宇治学によって宇治の抹茶やお茶がどういうものかということに興味が出てくる子どもも大勢いるだろう。我々の世代には無かった貴重な体験を今の子どもたちはできていて、大変うらやましく感じている。また、地域に目を向ける良い機会になるため、ますます進めていただければ有り難い。

<委員>

一流のお茶や一流の器というものに、ごく日常的に自然な形で触れるという体験をされ、これは心の財産として人間性の基礎になっていくのではないかと思うので、お茶に限らず様々な面で進めていっていただきたい。

<教育長>

お茶や陶器を作っていた方々が非常に嬉しそうな顔をして見ていただいていたことが、横にいて嬉しかった。

<委員長>

笠二小の抹茶体験学習の時期と前後して、三室戸小学校の抹茶体験がNHKテレビで放送されていたのも見たが、笠二小では少人数で行っている良さもあり、子どもたち一人ひとりのいきいきとしている顔が見えた。また、三室戸小では地域の方がボランティアとして指導に来られているなど、学校が地域との協力体制を作っていくことにも役立っている。これから総合的な学習や地域学習、地域で育つということを進めていく場合には、地域との隣在的な協力と、普通の教科とは異なる予算が必要であって学校運営費だけではできない面があるので、そういった面が課題になってくると感じた。

<市長>

本当に良い勉強になった。素朴であり、お茶の様々なルールや礼儀作法を教えていただき、今までそういった機会がなかったことを不思議に感じているところである。宇治学は一度だけの問題ではなく、年々行っていくことによって組織的・体系的に良さが出てくると考える。このように早くから子どもたちが取り組んでいる姿を見て本当に嬉しく思うし、宇治茶をいくら観光の面から宣伝していても、子どもたちや家庭に根付かない限り、宇治茶の普及というのにはあり得ないのではないか。そして、将来は世界や日本、東京などで活躍する子どもたちや、宇治で故郷を守るという子どもたちに、宇治茶を中心にした宇治学を思い出してほしいと思っているため、今後とも続けていただきたい。

<委員長>

笠二小は地域の陶器などと結び付けて取り組んでいけるし、地域ごとに何を広げていくかということを考え、一度だけで終わらないようにする取組が大事だと感じる。

<教育長>

指導する先生方もよく勉強されていると感じた。茶道連盟の方からも様々なご支援をいただいたことに感謝している。

<市長>

人間が成長していく上で、宇治学のように特産や故郷のこと、礼儀作法を知るということとは非常に大事だと考える。また、全学校の3年生が取り組むということがとても良いことである。岡屋小学校のように茶摘みから行っている学校などもあり、それぞれの学校の特徴を活かして宇治学に取り組むことに大きな意味があるし、人間的に非常に大事なことだと思うので、また宇治学について様々なご意見をいただければ有り難い。

その他

<事務局>

その他については、本日は特に案件はない。

【4】 閉会

閉 会 (午後6時20分)